トップレベルの健全性でみな さまの信頼にお応えします。

1兆5,547億円

実質純資産額

健全な経営を維持していくための十分な純資産額を備えています。

実質純資産額とは、時価評価した資産から、ご契約に関わる各種負債等を差し引いた、いわゆる時価ベースの純資産額で、保険会社の健全性の状況を示す行政監督上の指標のひとつです。平成15年9月末の実質純資産額は1兆5,547億円で、総資産に対する比率は9.7%と十分な水準を確保しています。

6,924億円

含み損益
（一般勘定資産全体）

バランスのとれた堅実な資産内容で、十分な企業体力を堅持しています。

含み損益とは、資産の時価と帳簿価額(取得価額)との差額を指し、保険会社の企業体力を表すもののひとつです。平成15年9月末は、一般勘定資産全体で6,924億円の含み益を確保しています。

■当社は主要5資産すべてにおいて、含み益を確保しています。

	国内公社債	国内株式	外国公社債	外国株式等	土地
平成15年9月末含み損益	1,194億円	4,136億円	457億円	855億円	375億円

1,108億円

基礎利益

保険本業において高い収益性を確保しています。

基礎利益とは、保険本業の期間収益の状況を表した、生命保険会社のフローの収益力を示す指標のひとつです。平成15年4～9月（半期）の基礎利益は1,108億円と高い収益性を確保しています。

逆ざやについて

生命保険会社は、ご契約者にお払込みいただく保険料の計算にあたって、あらかじめ資産運用による一定の運用収益を見込み、その分保険料を割り引いて計算しています（この割引率を「予定利率」といいます）。そのため、保険会社は、毎年割り引いた分に相当する金額（これを「予定利息」といいます）を運用収益などで確保する必要があります。ところが、かつてない超低金利が続くなかで、この予定利息分を実際の運用収益などでまかなえない状態が一部の契約で発生しており、これを「逆ざや」状態といいます。しかしながら当社は、逆ざやが生じていても、保険本業の期間収益を表す基礎利益は、十分な水準を確保しています。

0.84%

（リスク管理債権額の貸付残高に対する比率）

リスク管理債権

厳格な自己査定を実施し、資産内容の健全性を堅持しています。

リスク管理債権とは、貸付金のうち、返済状況が正常でない債権を「破綻先債権」「延滞債権」「3ヵ月以上延滞債権」「貸付条件緩和債権」の4つに区分した総称です。平成15年9月末のリスク管理債権額は403億円、貸付残高に対する比率は0.84%と、きわめて低い水準を堅持しています。